

高校総体累積得点が示す「春日部高校陸上競技部」

自画自賛もおかしな話だが、春高陸上競技部は素晴らしいと思う。この歴史ある伝統校のうんちくを、卒後25年足らずの小兵の私がするのも通常なら気が引けるものだ。しかし大選手でも監督でもない、ごくごく平均的なOBであるが私が語るから「春高陸上部らしい」といえる。我々平凡な選手達が堂々とOB会を楽しめるという構図が、春高陸上競技部の魅力を、最大に現しているといえよう。

- 1、 90年間、一度も意志が途切れていない。
- 2、 選手は自分の選択意思で部活動をしている
- 3、 上下的軋轢、圧力は一切ない。
- 4、 文も武も、両立し続けている。偏ることはない。
- 5、 競技、クラブ、母校に敬愛の心を持っている。
- 6、 競技面での歴史・戦跡がある

これらの因子は偶然の産物ではない。偶然で「人の心」は集まらない。

110年続く春日部高校の校風、学生の気質、東部地域の人柄・・・そして関根先生を始めとする監督方の愛情だと思う。

「愛情」と書くと一見、ただおおらかなように思われるが、それは違う。幸風会に出て分かるのだが、関根監督の選手一人一人に対する細やかな配慮には改めて驚く。ある名門校の監督は「千の目を持つ」といわれているそうだが、まさしく関根先生も同じであると確信する。各選手は当然、戦力や性格など個々さまざまだろう。なにより大学進学が全員の大きな目標にあるので、勉強の抑止はできない。受験を理由に退部する学生を、無理に止める事もないだろう。それもまた選択肢。そんな大勢の選手を理解し、出来る限り可能性を高めてあげられる指導力を関根先生は持つのだ。

それは、当事の冊子をみれば一目瞭然。荒木同窓会長に見せていただいたものだが、練習日誌が事細かに記されていた。個人の記録の伸びや、特徴、コンディションなどさまざまな詳細が記されている。もちろん手書きで、ガリ版刷りだ。今の高校生は見たことがないだろうが、この冊子を部員全員に配るのには、相当重労働だ。かなりの時間も割かれるだろう。

部員と寝食を共にし、家庭のプライベート時間も大きく削っての事だったろう。休日もほとんど費やしたはず。その愛情を受けてこそ、今これほどまでに続く、脈々とした大河の流れがあるのだ。

以下にインターハイ第1回から60回に至るまでの累積得点を示す。

## 歴代学校対抗総得点 男子ベスト20 (150点以上)

	この10年	過去50年	総合
①成田(千葉)	196.5	259.833	456.333
②浜松商(静岡)	67.5	384	451.5
③中京大中京(愛知)	76.5	369.5	446
④添上(奈良)	69	354	423
⑤清風(大阪)	79.5	236.5	316
⑥磐田南(静岡)	21	294.5	315.5
⑦洛南(京都)	94	140.5	234.5
⑧八女工(福岡)	15	205.5	220.5
⑨東海大浦安(千葉)	90	98	188
⑩名古屋(愛知)	71.5	112	183.5
⑪仙台育英(宮城)	101	80	181
⑫東農大二(群馬)	56	121.5	177.5
⑬市船橋(千葉)	53	121	174
⑭日大二(東京)	0	167	167
⑮大阪(大阪)	106	60	166
⑯西脇工(兵庫)	46	118	164
⑰宮崎工(宮崎)	28	129	157
〃鳥取中央育英(鳥取)	42	115	157
⑱春日部(埼玉)	28	128.5	156.5
⑳浜松西(静岡)	16	137	153

春高陸上部は全国20傑に入る好成績を示した。

この得点歴史にはさまざまなドラマがある。入賞を期待されたが、惜敗したケースもかなりあったろう。全てが計算通りにはいかないのは世の常。どの学校も辛酸をなめているのだ。

もちろん累積得点は、インターハイに出場した選手がなつかしむものではない。90年続く、1000人近いOB全員の熱い想いで勝ち取った結果である事はいうまでもない。

そしてまた次の世代へ脈々と引き継がれていく。

筆 高37回 野本 順一